

教養コース ④ 国際社会学講座

文化人類学の視点から  
多文化共生社会を考える

第4回

漁村（韓国・日本）の  
生活からみた暮らしと文化  
（コミュニティ・祭り・変化と持続）

講師 中野 泰氏  
筑波大学人文社会系準教授

日 時 11月20日（日）13:30～15:30  
会 場 鶴瀬公民館 第3集会室  
講 師 中野 泰氏 筑波大学人文社会系準教授  
受講生数 24名

1. はじめに

韓国の社会文化をテーマに、講師のフィールドワークの内容をもとにふりかえる。

1. フィールドとフィールドワーク
2. 食文化としてのフェ（刺身）
3. フェ（刺身）を商売とする村落
4. 終わりに

(1) 相互理解と緊張

- ① 文化相対主義 自民族中心主義
- ② ダイナミズム 影響→植民地／都市化
- ③ 生活・文化 柳田国男 庶民の文化と知識人の文化が分化している。  
庶民の生活意識、実感



講 師 中野 泰氏

④ フィールドワーク フィールドは韓国 東北部江原道（こうげんどう）  
東草市大浦 大浦堂3集落で大浦は 2018人、戸数679

- ・漁村の民俗を調査 2003～2007年
- ・生業従事者 商業、漁業、農業
- ・港 国家港 ランクがあり、貿易港、国家港、港と区別。  
大浦は国家港の位置づけ。
- ・大浦には2か所の堂があり、ハルモニ、ハラボンが信仰の対象
- ・定期市が賑わう。

(2) フィールドワーク

- ・ハルモニ（おばあさん）の家に9か月居候、家は家族（息子）と2人暮らし
- ・村の出来事 青年会のピケ



## 2. 食文化と暮らし

(1) フェ（刺身）を仮設店で売る

韓国の中でのフェを写真で見ると、お重に入れられていて見た目はうな重、人口ワサビやキムチなど数品が添えられている。

- ① 鮮魚を売り、その場で刺身に下ろす。
- ② 簡易的な場所で酒類も販売する。
- ③ そこでは魚介類を揚げもの、網で焼いたものを提供する。

## (2) 村の生活におけるフェ（刺身）

村民は日常的には食べない。

- ① 薬（医食同源）例タコ
- ② 発酵食品 シッケ おつまみに最適
- ③ 漁師食 生食
- ④ 観光向けの郷土食
- ⑤ 来客の饗応→富裕層は皿数が多く、一般はご飯のほか3品ぐらい。  
王宮レベル12品、上級7～9品

2. 食文化と暮らし  
(1) 「フェ（刺身）」を売る

- ・フェ＝醃
- ・常設店：贈家（製醤＝フェツチブ）
- ・メニュー ＊ ＊ ＊

種類	単位	価格	種類	単位	価格
ヒラメ	個	50000	ヒラメ	個	30000
真ソイ	Kg	50000	真ソイのアラ汁	Kg	30000
鯛	個	70000	鯛のアラ汁	個	25000
カレイ	大	50000	貝の汁物	個	10000
	小	40000	アワビ粥	個	10000
	特大	100000	ムルフェ	個	10000
	大	70000	刺身丼	個	10000
盛り合わせ	中	60000	ご飯	個	1000
	小	50000			
			イカ		
			ホタテ		20000
			ホヤ		10000
			ナマコ		20000

## 3. フェ（刺身）商売の村落

### (1) 自治組織

- ・組織 繁栄会 マウル 朝鮮戦争後
- ・目的 住民相互間の親睦、団結を図る。
- ・役員 3年任期で会員は、居住世帯の世帯主。
- ・役員会 正副会長、理事、監事、
- ・事業 財産管理 収入は不動産賃貸料  
47%で商業的性格あり  
不動産売買、敬老会
- ・共同事業は祭祀

(2) 村生活における「フェ（刺身）」

- ・村生活で「フェ（刺身）」は日常的に食べない
- ・①薬（医食同源）
- ・②発酵食品（シッケ＝식혜）
- ・③漁師食
- ・④観光向けの郷土食
- ・⑤来客の饗応

### ① 背景としての家結合は見られず雑婚村

- ・財産力の有る有力な家は見られず雑多 58姓
- ・長男親睦会 20人ぐらい 発言の有った港開発の話題に反発

### ② 背景としての定期市

- ・戦前 日本の役所、駐在所、郵便局、定期船寄港地
- ・戦後 越南民定住 鉄鋼石産業：港付近で船荷  
5日市 週の1日と6日に開催5日間隔

発酵食品（シッケ＝식혜）

- ・素材：カレイ、ツマグロカジカ、ハタハタ、スケトウダラ
- ・準備：魚を乾燥させ、身を切り取って残った首回りの部分を主に用いる。顎、えら、頭などを包丁で小さく切り分け、さらに包丁で切りみを入れ、叩いて柔らかくする。
- ・作成：ヤンニョム（トウガラシ粉、ニンニク、ショウガ）で漬け、粟を入れる。
- ・→ 10日間ほどで骨まで柔らかく。

②背景としての定期市

- ・戦前 日本の役所、駐在所、郵便局、定期船寄港地
- ・戦後 北朝鮮から避難する「越南民」定住
- ・襄陽 鉄鉱石産業：港付近で船荷の積み換え
- ・定期市 五日市：1、6日（5日間隔）
- ・規模 ①中央洞（常）、②永朗洞（常）、③大浦（定期）
- ・→行商：海産物／アヒル、カモ

## (2) 漁業の位置

- ・年平均所得は28500（平均19229）
- ・貝類養殖 アワビ（1976年～）ホタテ（1992年～）
- ・共同作業 契員（わかめ養殖、岸壁清掃など）
- ・定置網 中国人雇用 60%
- ・マクサ（中国人宿舎）共同生活
  
- ・競り 漁船の生簀ごと見せて パフォーマンスで観光客が見物して  
フェ（刺身）を注文

## (3) 祭祀：城皇祭

- ・運営 自治組織、クツ（港）で2日間実施  
経済的裏付け 繁栄会70%、寄付金30%、繁栄会は朝鮮戦争後発足
- ・目的 マウル（村）の繁栄、豊漁、観光客の安全、水難者の慰霊
- ・準備 焼酎（どぶろく）など
- ・祭官 繁栄会役員  
謹慎 隔房、井戸に注連縄
- ・巫女 儒教的、占い

特徴：漁業 竜王クツ、商業コリクツ 対象：遭難者の死霊、水難事故の死霊、死霊祭祀



## (4) 村の中のナンジョン（店）

正式な商人から都市化に伴う非認可商人の増加、背景には後継者難

7～8月に観光客増

- ・運営と連携

初客（マス）が大事、呼び込んで案内をする。

① 食堂 ②業者 ③釣り船の受付 ④水産業者 養殖魚の供給はタイ

(5) 葛藤・背景

- ・激変 港の開発で環境が変化
- ・目的 国が総合観光漁港を目指す。846億ウォン（84億円）  
工事期間 6年（2004～2009年）
- ・緊張 国・市住民の対立→反対運動
- ・意識 「このマウル（集落）に住んでいるのは漁民だけなのか？」  
その後、漁民は漁業権の支払いを受けて沈静化
- ・以降 日の出祝祭を開催
- ・背景 金大中政権下で東北域の広域開発計画

おわりに

フェ、ナンションは日本人の観点と違う。

- ・日本文化の観点から一方的に捉えてよいのだろうか。
- ・自文化中心主義→文化相対主義
- ・ダイナミズム
- ・各種の影響は生活へ部分的に取り込まれる。（宗主国／都市）
- ・各地域の生活文化を現代に適応
- ・生活者の意識や視点でとらえていく
- ・フルドワーク 異文化から自文化を対象にする。
- ・共生社会に向けて、自分化を当たり前とすることに対して気付き、大事なポイントになるのでは。

質疑応答

受講生より多くの質問があり、講師から丁寧な説明を受けた。  
さらに一層、講義内容を深めることができた。

\*第3回、第4回については講義のレジメがなく、不十分なまとめになりました。

文責 加藤久美子